

わが国における妊娠中の淋菌子宮頸管炎に関する実態調査結果

母子保健部会より

2018年6～8月に会員のみなさまにご協力いただいて実施した妊娠中の淋菌子宮頸管炎実態調査の結果を報告いたします。

全国2,330の分娩取扱施設に、2017年10月～2018年3月までの間に分娩となった妊婦の淋菌子宮頸管炎の実態についてアンケートを依頼し、1,876施設(80.5%)から有効回答をいただきました。

妊娠中に淋菌子宮頸管炎に対するスクリーニング検査を実施している施設は1,876施設中261施設で、全体の13.9%でした。

淋菌子宮頸管炎の頻度はスクリーニング検査を実施している施設では約1.3%であったのに対して、スクリーニング検査を行っていない施設では約0.2%と有意差を認めました。また、20歳以上の妊婦の淋菌子宮頸管炎罹患率が約1%であったのに対して、10代妊婦では約3%と有意に高率でした。

抗菌薬への耐性については、ガイドラインで第一選択薬とされているセフトリアキソン(ロセフィン[®])には耐性菌が認められませんでした。アジスロマイシン(ジスロマック[®])では0.5%に認められました。

今回、新生児予後についての調査は行いませんでしたが、スクリーニング検査を実施していない施設においては淋菌子宮頸管炎の約80%が見逃されている可能性があり、わが国でも妊娠中の淋菌感染症スクリーニング検査の必要性について検討すべき時期に来ていることが推定されました。

これらのデータは、「性の健康医学財団」と協力して、STD母子感染予防事業に役立てていく所存です。会員のみなさまの本調査へのご協力に改めて深く感謝申し上げます。